

第 64 回ドイツ文化ゼミナールに参加して (T. Sugiyama) [J]

2025 年の 3 月 12 日から 16 日にかけて、私は個人通算 5 度目のドイツ文化ゼミナール、そして初めての蓼科ゼミに参加した。読む人が読めば違和感を覚えるであろうこの一文には、しかし嘘偽りは一切ない。日本独文学会の会員になって以来、私が参加できた文化ゼミといえば、オンラインで活況を呈した二回と、慶應義塾大学で成功を収めた二回とに限られていたからである。もっとも、文化ゼミを知りながら初の蓼科に臨んだという参加者の声は、過去にも報告されている（2014 年の三宅舞先生によるコラムを参照）。文化ゼミの全体像に関しても、すでに先輩諸氏によって詳しく書き記されている通りである。そこでこの報告文では、六年ぶりに復活した蓼科ゼミの経過を伝えつつ、それを待ちわびた一参加者の胸中に残るある種の「消化し切れなさ」にも触れることで、今年の文化ゼミならではの空気感をお伝えしたいと思う。

初日の晩、華やかなレストランでの夕食会ののち、実行委員会委員長である Buchenberger 先生の朗らかな開会の辞と、学会理事の金先生による、早くもゼミのテーマに対し問題提起的な挨拶とをもって、私たちの蓼科ゼミは幕を開けた。最上階の宴席から一階の会議室へ、20 名弱の参加者たちが徐々に移動していく際には、「これから何が始まるのだろうか」という期待、あるいは緊張のためだろう、言葉少なな面々の様子がうかがえた。もちろん、先述した通り文化ゼミには毎回テーマが与えられている。今年掲げられた題目は **Populäre Kultur und Literatur**。このテーマに沿って、招待講師であるジューゲン大学の Niels Werber 教授を囲みながら、参加者たちは個人による研究発表や、指定されたテキストに基づく少人数でのグループワーク (**Gruppenarbeit**) を行っていく。それは誰もが知るところであった。だけれども、一様に先の見えない静けさをもって、Werber 先生による初日の基調講演、そして以降の各セッションに臨んでいたように見えたのは、気のせいだろうか。

そもそもテーマに馴染みがないわけがないのである。Populär とは、Werber 先生も繰り返し触れていたように思われるが、多くの人々に注目されている、という量的な意味で理解されるべき言葉である。最初の基調講演でも述べられた通り、Populärität とは、決して形式の問題ではないのである。例えば売上ランキングや SNS 上での視聴回数、フォロワー数などによって、Populärität は計量化可能でなければならず、Populäre Literatur は、古典やカノンに列せられる場合とは異なる基準で判別される。そして読者もまた、ある文学作品を、それが populär であるからこそ読むのか、あるいは読まないのかという点で二つにタイプ分けされる。このように、現代社会における文化受容のあり方が説明されていくさまは、清新そのものであった。合間で紹介される事例にしても、Tiktok 上での Buchmesse や若者言葉でリライトされた G. ビューヒナーの『ヴォイツェク』、「古典だから読め」と教育機関で言われながら、実際には全く読まれない小説として A. シュティフターの『ブリギッタ』が登場する

Tonio Schachinger の *Echtzeitalter* (2023) など、馴染みがないながらも、非常に興味を惹くものばかりであった。

さてこれはどうしたことか。Populär とは人口に膾炙しているということではなかったか。初日を終える頃に脳裏をよぎったこの疑問は、その後氷解するどころか、むしろセクションを経るごとに重みを増していった。それはあたかも、ゼミの四日目にホテル帯を純白に染め上げたあの雪のようであった。屋外の景色が一変したのは、ちょうど最後の Gruppenarbeit に取り組んだ日のことである。この小グループでの意見交換は、①Bild、②Ton、③Schrift という日ごとのテーマによって指針を与えられていた。さらに今回は初の試みとして、実行委員会の先生方による個別テーマへの導入解説が用意されていた。内容の詰まったレクチャーの数々は、けれども不勉強な稿者にとっては、「開拓」と呼ぶ方がしっくりくるような新しさと広大さを有していた。Bild の回では、先史時代の壁画から始まる欧州のコミック史が、ドイツを中心に各国の特徴を踏まえて語られ、翌日の Ton では戦後ドイツ史を視野に収めながら Mittelalter-Rock のバンド名鑑が紡がれていく。最終日の Schrift では R. ムーゼルの『生徒テルレスの惑乱』を読むための参照項として、やおい、BL 文化が提案された。これらの導入を受け止め Gruppenarbeit の足掛かりとすることが、果たして何人にできただろうか。私などは、蒙を啓く話の数々にただ魅了されるがままであった。

ともあれ、場があたたまったおかげだろう、全ての Gruppenarbeit は熱を帯びていた。私が参加したグループでは、populär というよりむしろ klassisch なテキストを通して、テーマ及び小テーマに関する意見が交わされたのだが、それもまた議論を盛り上がらせる要因となっていた。T. ベルンハルト『古典絵画の巨匠たち』は、コミカライズによっていかなる解釈を可能にしたのか。F. シューベルトの歌曲『冬の旅』を今日まで populär たらしめているものは、何なのか。『テルレス』を下敷きにした映画『Teenage Angst』(2008) は、観客に対しどのような視覚的、聴覚的効果を及ぼしているのか。こうした問いを含む充実した話し合いをおもえば、同時刻の別グループでも豊かな時間が過ごされたことだろうと容易に想像がつく。とくに音楽バンド Rammstein や連載小説 *Perry Rhodan* を扱ったグループの議論は、それらを Werber 先生が二回目、三回目の基調講演でこれまた知的好奇心をくすぐるかたちで論じていたがゆえに、刺激的なものとなっていたに違いない。実際、ベテランの先生から年若い院生まで、それぞれが印象深い発言を残したり、LeiterIn として堂々の立ち回りをみせていたという話が、休憩時間にはどのグループの参加者からも伝わってきた。

ここまで文を連ねてきて気付いたが、なぜセクション外での交流に触れずにいられたのだろうか。共同部屋が提供されている蓼科ゼミらしく、今回私は年の近い他大学の院生たちと寝食を共にし、親睦を深めることとなった。翌日の Gruppenarbeit のための予習や、発表の振り返り、テーマから派生した文化論など、彼らと文字通り昼夜を問わず限界まで語り合

った時間がなければ、ここまでゼミにのめり込めなかったかもしれない。そうした歓談は、バーを貸し切り、日をまたいで続く連日の飲み会において、先生方を中心にして更なる広がりを見せていた。およそ日頃の研究生活では味わうことのない解放的なこの時間には、Werber 先生も度々顔をお出しになり、院生たちを含む日本の GermanistInnen と楽しそうに語り合ってた。このような場で発せられた何気ない一言が、深く心に残ることもある。ある先生の親切に接して特別な文学体験を味わい、熱いものがこみ上げてきたことにも、きっとあの場ならではの理由があったのではないだろうか。

このような憂いなき時間の裏に、実行委員の先生方による運営の苦労があったことは想像に難くない。Gruppenarbeit での創発的な導入については前述の通りであるが、それ以外にも開催期間の会場設営、機材準備に各所での進行役など、委員の方々は常に「タテシナ」という生物に体液を巡らせていた。それを強く印象づけられたのが三日目である。午後一番に企画されていた酒蔵巡りでは、多くの参加者が「諏訪五蔵」と称される老舗の地酒を思い思いに飲み比べ、春の陽気に包まれた。委員の先生方に引率された彼ら彼女らの笑顔こそが、今回の文化ゼミがいかなるものであったかを、何よりも物語っていたのではないだろうか。そして同日の晩、これまでもゼミナールの欠かせないプログラムとなっていた Filmabend によって、私たちの喜びは更に高まった。F. ラングの無声映画『ドクトル・マブゼ』に音を付ける様々な試みの紹介は、Gruppenarbeit で分けられていたテーマ圏を、再度結び合わせるような思考を、各人に供するものであっただろう。蓼科に駆けつけ、一夜限りの映画館を用意して下さった Becker 先生に、深くお礼申し上げる。そしてやはり実行委員会の先生方にも、重ねてになるがお礼申し上げたい。全プログラムを締めくくるパーティの場で、貴重な学びを与えて下さった Werber 先生にお礼の品が渡されたのち、委員の方々にも一同から感謝の気持ちが示されたのだが、蓼科ゼミの再出発を成し遂げた皆さんにもう一度、ここで言い尽くせぬ感謝の意を表したい。本当にありがとうございました。

振り返ると、もらいっぱなしの五日間であった。Werber 先生は多くの学問的な教えに加え、先生が関わる研究プロジェクト Transformations of the popular のメッセージが入ったバッグやペンを参加者に振る舞い、私はシャツをいただいた。また、ここまで言及できずにいたが、文化ゼミでの学びをいっそう多方向に拡散させていった各個人発表からも、非常に多くのものを与えられた。その内容の豊富さは、たしかに populär な対象が論じられながら、しかししばしば聴衆の殆どにとって未知の主題が扱われていくという奇妙な事態に由るものだったのであろうか。いや、それだけではない。Populär でありながら人によっては populär と映らない研究対象は、同時に Germanistik でありながら Germanistik を狭い枠に留めない形で論じられていたように思われる。そしてそれが、活発な質疑応答の動因となっていたのである。こうした流れには、社会学的関心を文学の領野で保ち続けてきた Werber 先生の存在も、大きく影響したに違いない。依って立つ専門の地平が絶えず揺るがされ、更新されてい

くようであったからこそ、それぞれの発表内容が今も頭を離れずにいる。論集として活字化されるのが、今から楽しみでならない。

「研究発表を申し込めばよかった。次は必ず……」と繰り返しこぼしていた参加者も、やはり今回の発表に当てられていたのだろうか。受け取られた靈感は、旅人の仰ぎ見る星のごとく、未来の目的地へと人々を方向づける。蓼科に舞い戻ったこの一大イベントは、早くも次年度に向けて動き出しているらしい。Populär と Nicht-populär の境を越えた「タテシナ」が、次に向かうはいずこか。誠に貴重だったあの五日間をまだ飲み込めずにいる私も、この筆をおき、新たな日々に戻るとしよう。最後になるが、今後も一人でも多くの方が、いかなる不当、不快な思いをすることもなく、私のように蓼科ゼミで得難い収穫を得られることを心より願っている。

杉山 東洋（京都府立大学ほか非常勤講師）



（写真 1）

酒蔵巡り後の諏訪湖にて



（写真 2）

四日目、宿泊部屋の窓から

0205

作成日 : 2025/04/12